家族ぐるみの交遊６０年

枝　和四郎

君は東北帝国大学（現東北大学）理学物理科を昭和４年卒業し、本田光太郎博士所長の金属化研究所に就職した。私は翌年工学部金属科を卒えて同研究所の軽合金部に配属となった。この部はヘロアロイを研究主題とし高橋清教授担当であった。

研究題目は外部からの委託も多数あって、満鉄からは遼東半島大石橋に産出する Mg が鋼芯 AL 送電線の AL に代行の可否研究を依託された。一時期徳永君と共同で Mg 合金の機械性と電気抵抗測定の研究にあたった。この時期から終生交遊することになった。私は在職２年して九州飛行機工業（株）（元渡辺鉄工所）に請われ,君も幾ばくもなく湯浅電池に迎えられた。この頃から研究所職員の現業引き抜きが増加してきた。湯浅電池に赴任した君は研究と現業とを兼ね逐次業績を積んで常務取締役に栄進し、つづいて同系の湯浅エンジニアリング社長に数年就任し後輩に禅譲したのであります。

昭和７年君と仙台で別れ、ともに陸海空三軍の軍需企業に奉公しながら２０幾年間相交わることなく過ぎた。終戦と同時に九州飛行機（株）は米軍が速やか会社機能をストップした。私はじめ従業員は殆ど失職した。私は九州の地で幾つかの転業の後に縁あって住友金属工業（株）に就職し九州から関西に移った。私は大阪勤務と、息子が京都大学に通学するのに便利なという理由で高槻市を選んだのであったがその住居が偶然にも徳永君の自宅の隣地であった。当時同君は湯浅の小田原工場長で自宅を会社に委託していて、やがて君は本社勤務となって、隣同士の生活が終生続くことになった。同君夫人と家内とは仙台当時から既知の間柄で両家は木戸なしで裏口から往来の家族ぐるみの年月を過ごした。夫人と妻とは長唄が同好で毎週大阪から杵屋の師匠をお呼びし両家お互い交代で稽古場にし、同門の誰かを呼んで隔月温習会を楽しみ、また年一回杵屋同族合同して大阪春季観光大会行事に参加し、大阪産経新聞大ホールで好評と博していた。

徳永、枝両親の老齢を両家の子供たちの勧めで、３０余年住みなれた八丁畷を君は茨木のご次男で医学博士のお宅に、私は娘夫婦に近いマンションに転居し、それらを終焉の地と考えた。君が茨木に転居後幾ばくもなく夫人急逝し、当方も家内は夫人の死去後１カ月足らずで他界した。不可解の悲しみであったと君と語り合った。

茨木と高槻に別れあってからはお互い持病の腰痛で面談が十分できないので電話で近況の消息がしばらく続いていたのに、死去される両３月前から君が気力弱まったと、ご子息夫人が取り次ぐようになった。今年１月に君は米寿を祝い、やがて寒さが去れば元気も回復するであろうと、知らされていた。君の干支は丑年で私の虎をターゲットに精進すると日ごろ語っていた君が私を残して去った。たとえ人を介してでも語り合いが叶えたらとの思いが今はただ君の冥福を祈るとは何と悲しく口惜しい事です。